

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 10 月 25 日現在

機関番号：17401

研究種目：基盤研究(A) (一般)

研究期間：2011～2015

課題番号：23242055

研究課題名(和文) ケニア海岸地方のスピリチュアリティおよび宗教性に関する人類学的国際学術研究

研究課題名(英文) Anthropological International Research on Spirituality and Religions in Kenyan Coast

研究代表者

慶田 勝彦 (KEIDA, Katsuhiko)

熊本大学・文学部・教授

研究者番号：10195620

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 28,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究課題は東アフリカの宗教性およびスピリチュアリティを中心的なテーマとして、日本、ケニア、英国の研究者(人類学、宗教学、哲学、映像・写真作家等)との国際共同研究を推進すること、上記のプロジェクトに若手研究者の育成を組み込むこと、上記との成果を国内外で発表することを主たる目的としていた。

～ についてほぼ期待通りの成果を得られることができたし、最大の成果は東アフリカ研究を媒介として日本、ケニア、英国の国際共同研究の連携を強化することができ、研究拠点を形成してゆくためのユニークな学術ネットワークを構築することができた点にある。

研究成果の概要(英文)： This research primarily focused on religion and spirituality in East Africa, and it accomplished the following outcomes. Firstly, it enhanced international and cross-disciplinary research through collaboration between experts from Japan, UK, Kenya and Italy whose disciplines are anthropology, religious studies, philosophy and filmmaking. Secondly, this project created opportunities for younger researchers to do ethnographic fieldwork in East Africa, and to make presentations at international academic conferences such as IUAES. Thirdly, the research outcomes achieved good results in peer-reviewed journals, panels at international academic conferences and socio-cultural anthropology seminars inside and outside Japan. Finally, this project made a significant and unique academic network for East African Studies between Japan, UK, Kenya and Italy through the research.

研究分野：文化人類学

 キーワード：東アフリカ 文化人類学 宗教 スピリチュアリティ 国際共同研究 ミジケンダの聖なるカヤの森
 妖術・呪術 アイデンティティの多元性

1. 研究開始当初の背景

本研究に着手した背景には、昨今の人文社会科学の領域で要請されている学問のグローバル化を視野に入れ、これまで日本人研究者がアフリカで実施してきたフィールドワークに基づく研究成果を国際的な学術研究ネットワークの中に組み込んでゆく必要性の認識、研究代表者の主たるフィールドと研究テーマであった東アフリカの宗教およびスピリチュアリティを中心としての認識に基づく具体的な計画立案の必要性、上記には国内外の若手研究者を組み込み、次世代の研究を担ってゆく若手のグローバル人材育成が急務であるとの認識があった。また、すでに①～③を推進するための国内学術の研究連携を研究代表者が構築していたことも本研究を開始した当初の重要な背景のひとつである。

2. 研究の目的

本研究の目的は上記背景を踏まえ、東アフリカ研究者を中心とした国際的な人類学的共同研究に着手し、国際的な研究動向を検討しながら国内外の学会等での発表、英語および日本語での論文等の刊行、上記に若手研究者を組み込んだ次世代の研究人材の育成、そして学術的貢献のみならず、本研究の一部を社会へと連携してゆき、人類学およびアフリカ研究を大学の教育ならびに地域へと還流させてゆくことを本研究の目的とした。

3. 研究の方法

上記目的を達成する方法としては、研究代表者および連携研究者(岡崎、浜本)と海外の研究協力者(D.Parkin、S.Grassi、M.Chidongo)を中心として国内外の研究を推進し、20代後半から30代後半までの国内外の若手研究者をの活動に取り込み、各研究者のアフリカでのフィールドワーク(5人)および国際学会(2013IUAES)での発表(9人)を支援するという方法を採用した。そして、研究代表者、連携研究者(岡崎)、研究協力者(D.Parkin)を中心としてアフリカ諸国(主として東アフリカ)の宗教とスピリチュアリティについての研究動向の検討と新たな研究連携を模索した。最後に上記の成果の一部は「アフリカ人類学セミナー」において年に1～2度は一般公開すると同時に熊本大学主催の「サイエンス・カフェ」等で社会に還流してゆく方法を採用した。また、ケニアとの共同研究ではプワニ大学(ケニア・キリフィ)およびBIEA(ナイロビ:英国東アフリカ研究所)との連携強化を研究協力者のM.Chidongo(プワニ大学)とS.Grassi(イタリアの映像作家)、野中元(日本の写真家)との協力を得て推進した。

4. 研究成果

研究目的に照らして、本研究の成果につい

て述べる。

国際的な人類学共同研究の推進における最大の成果は、2013年度に開催されたIUAES(国際人類学・民俗学科学連合:マンチェスター大学)主催の学会でTrust in super-diversityという分科会を研究代表者(慶田)、連携研究者(岡崎)、研究協力者(D.Parkin)で組織し、日本(7人、熊本大学、一橋大学、神戸大学、立命館大学等)と英国(5人、オックスフォード大学、うちケニアからの留学生1人を含む)の研究者12名で発表を行ったことである。本研究期間中に論集を刊行する予定であったが、いくつかの事情で刊行は遅れている。しかし、2016年度中には刊行できる見通しである。第二に研究代表者の慶田は2013年度に国立民族学博物館で開催された国際シンポジウム「文化遺産はコミュニティをかたどるか?:アフリカの事例から」で発表(英語)を行い、その発表成果は刊行予定の特集(Senri Ethnological Studies)に採択されている(諸事情で刊行が遅れているが、刊行されるのは確実とのこと)。第三に本研究の理論的側面について、研究代表者は日本文化人類学会から刊行されている専門雑誌『文化人類学研究』(査読あり)に論文が採択され、掲載された(2015年度)。また、2015年度中には『アフリカの老人:老いの制度と力の民族誌』(田川玄・花淵馨也・慶田勝彦編、九州大学出版会)の共編者を務めると同時に本研究で実施した調査成果の一部を利用した論文(第2章、コラム1)を執筆した。なお、連携研究者の浜本は2013年度に『信念の呪縛』(九州大学出版会)を出版し(本書を含むドゥルマ社会の業績が評価され、2015年度の日本文化人類学会賞を受賞した)、本研究においても刊行以前に研究会で合評した。これらの研究成果の全てに研究協力者のD.Parkinおよび連携研究者の岡崎の示唆的な助言が反映されている点を付記しておきたい。

以上から、本研究の学術的成果は十分であったと判断している。

第一に、上記で言及したIUAESでの分科会で発表したのは組織者の3名を除く全員が若手研究者であり、本国際学会での発表を通じてそれぞれの若手研究者は博士論文執筆、投稿論文執筆、研究職の獲得、各種競争的資金の獲得へと研究の幅を広げている。第二に、6名の若手の研究協力者(香室:熊本、岡本:九大、橋本:一橋大、須田:名大、宮本:神戸大、八木:立命館大)には東アフリカ、南部アフリカでの現地フィールドワークを支援し、香室と橋本は博士号の学位取得、岡本と須田は学位論文執筆の完

成、宮本と八木は修士論文執筆に役立てており、学振のPDやDCに採択されている者もいる。

以上から、本研究に組み込んでいた若手研究育成に関する成果は予想以上に高いものになったと判断している。

研究代表者(慶田)と連携研究者の岡崎そして研究協力者のD.Parkinは定期的に連絡を取り合って研究の方向性を確認し、その成果はIUAESでの分科会組織、研究代表者のシンポジウムでの発表や論文刊行(日本語と英語)、新たな研究連携の可能性の発見等に現れている。

一般公開した「アフリカ人類学セミナー」は4回となったが、その他に小規模な研究セミナーを開催したり、また、研究代表者と連携研究者が他のアフリカ人類学に関するセミナー等に参加したりと、本研究を媒介とした研究ネットワークは理論的にも、また、アフリカ研究においても確実に広がった。特に、2015年度末に「アフリカ人類学セミナー」として開催したポップアフリカ2016@熊大は本研究に関わった連携研究者および若手研究者、海外の研究協力者、熊本大学の研究者によって一般向けに開催され、グローバル化を意識する高校生の参加を含めて130名ほどが来場した。また、映像人類学の観点からは、イタリア人映像作家のS.Grassiと研究代表者はミジケンダの妖術に関する映像作りを進め、その一部をポップアフリカ2016@熊大で公開した。さらに、ケニア海岸地方に点在している世界遺産「ミジケンダの聖なるカヤの森林群」のスピリチュアリティを焦点化した一般向けの「サイエンス・カフェ」(熊大主催)では、野中元(写真家)が撮影した「カヤの森」を展示し、その民族誌的背景について研究代表者が語るという実験的なイベントを開催し、社会連携のユニークな試みとして参加者から高い評価を得ることができた。最後に、2014年度にはケニアのプワニ大学人文社会系学部・大学院と熊本大学文学部・社会文化科学研究科(大学院)との間で正式な部局間学術協定を締結し、今後の二国間(間接的に英国東アフリカ研究所を含む3カ国間)の国際的な学術交流拠点を形成したのも学術的かつ社会的に大きな成果となった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)以下、本研究と関連する業績について記載する。なお、本研究の背景にもなった研究協力者D.Parkinの文献(慶田を引用)も一本記載している。なお、主として本研究の直接成果である研究代表者(分担者はいない)と連携研究者の主業績のみをカウント、

記載している。

〔雑誌論文〕(計4件)

慶田勝彦、2015、「エヴァンズ=プリチャードの遺産と隠された半分の真実：アザンデにおけるベンゲ型言説と司法的手続き」(<特集>人文学としての人類学の再創造に向けて)、『文化人類学』80(2)181-199。

慶田勝彦、「ケニア海岸地方ミジケンダ社会における<長老力>の両義性」(第23回日本ナイル・エチオピア学会学術大会 公開シンポジウム報告：アフリカから<老いの力>を学ぶ 老年文化の多様性)、『JANES(ナイル・エチオピア学会ニューズレター)』22：13-18。

Keida Katsuhiko, forthcoming, Still a Sacred Void? : Cultural Heritage, Sacred Places and Living Spaces of the Mijikenda Kaya Forests along the Kenyan Coast in East Africa, *Senri Ethnological Studies*.

濱本満、2015、「致死性の物語とフィールドワークの知：ある青年の死をめぐる」(第10回日本文化人類学会賞受賞記念論文)、『文化人類学』80(3)341-362。

(参考)

Parkin, David, 2011, Trust talk and alienable talk in healing: a problem of medical diversity, *MMG Working Paper 11-11*.

(Download:

www.mmg.mpg.de/workingpapers

2016.06.01)

〔学会発表〕(計5件)

慶田勝彦、2016、「ケニア・ギリアマにおけるポップ・セラピー：抗-妖術者の模倣と笑い」(Pop Therapy Among the Giriama, Kenya: Dewitcher's Mimicking and Giggling)、『ポップアフリカ2016@熊大 Africa New Generation!! 普段着のディープなアフリカ』(第4回アフリカ人類学セミナー) 熊本大学、2月28日。

慶田勝彦、2016、「ケニア海岸地方の憑依する白人(ムスング) アシナ・キビビと憑依霊の眼から見える人種とエスニシティ」、『政治的分類 被支配者の視点からエスニシティと人種を再考する』(国立民族学博物館共同研究会・代表：太田好信) 国立民族学博物館、1月30日。

慶田勝彦、2015、「死者のブーツ」とルーツ・オキナワ：人類学的自己形成における<影>あるいは<生きた魂>の役割、『沖縄民俗学会・九州・沖縄地区研究懇談会・合同主催研究会』、沖縄県立芸術大学、11月28日。

Keida Katsuhiko, 2013, Cultural Heritages, Sacred Places and Living Spaces: The Case of the Mijikenda Kaya Forests along the Kenyan Coast of East Africa, *The Core Research Project, Anthropology of Cultural Heritages: Communities and Materiality in Global Systems: Do Cultural Heritages Forge Communities? Cases from Africa*. The Fourth Seminar Room, National Museum of Ethnology in Osaka, 27-28th May.

Keida Katsuhiko, 2013, Waiting for 'Beba': trust talk and alienation talk about super witch-catchers along the Kenyan coast, *IUAES 17th Congress: Evolving Humanity, Emerging Worlds, panel G20: Trust in super-diversity*, University of Manchester, 6th August.

〔図書〕(計7件)
(共編、分担執筆)

慶田勝彦、2016、「老いの相貌 ケニア・ギリアマにおける老人の威厳、悲哀そして笑い」(第2章) 『アフリカの老人：老いの制度と力の民族誌』(田川玄・慶田勝彦・花淵馨也編) 33-60頁、九州大学出版会。

慶田勝彦、2016、「ギリアマにおける白髪老人と妖術-その結びつきを問う」(コラム1) 『アフリカの老人：老いの制度と力の民族誌』(田川玄・慶田勝彦・花淵馨也編) 61-67頁、九州大学出版会。

慶田勝彦、2012、「キベラ・レッスン ケニアにおける土着性とヌビのアイデンティティ」(第2章) 『政治的アイデンティティの人類学 21世紀の権力変容と民主化にむけて』太田好信編、78-133頁、昭和堂。

慶田勝彦、2012、「海辺の民 タウン(孔雀)の羽模様」(第7章) 『ケニアを知るための55章(エリア・スタディーズ)』松田素二・津田みわ編、56-51頁、明石書店。

慶田勝彦、2012、「ケニア沿岸地方の世界遺産 ミジケンダの聖なるカヤの森林群」(コラム2) 『ケニアを知るための55章(エリア・スタディーズ)』松田素二・津田みわ編、145-147頁、明石書店。

慶田勝彦、2011、「医療と悪 ケニア海岸地方における伝統医療者の専門職化とその座礁」(第17章) 『医療の本質と変容 伝統医療と先端医療のはざままで』高橋隆雄・北村俊則編、356-378頁、九州大学出版会。

(単著)

濱本満、2014、『信念の呪縛 ケニア海岸地方ドゥルマ社会における妖術の民族誌』、九州大学出版会。

〔産業財産権〕
出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

慶田勝彦 (KEIDA KATSUHIKO)
熊本大学・文学部・教授
研究者番号：10195620

(2) 研究分担者

なし ()

研究者番号：

(3) 連携研究者

濱本満 (HAMAMOTO MITSURU)
九州大学・人間・環境学研究科(研究院)・教授
研究者番号：40156419
岡崎彰 (OKAZAKI AKIRA)
一橋大学・社会学研究科・特任教授(現在は退職)
研究者番号：00409971